

2024年度
関西学院大学ロースクール
C日程

一般入試（法学未修者）
特別入試（法学未修者）

論文問題

《10:00～11:30》

○開始の指示があるまで内容を見てはいけません。

【論文問題】

問題文を読んで、〔設問１〕および〔設問２〕に答えなさい。

〔設問１〕

日本犯罪心理学会編『犯罪心理学事典』では、心的外傷(psychological trauma)について次のように説明されている。「トラウマ(trauma)とは、本来は身体的外傷のことであるが、精神医学的には主に心的外傷、すなわち心の傷をさす。それも、個人の対処能力を超える衝撃的な出来事を体験したときに生じる精神的な傷である。(改行)殺人、暴行、傷害、性暴力等をはじめとする犯罪被害は、被害者にとってトラウマ体験となることが少なくない。被害者は命の危険を感じたり、恐ろしい体験をしたりすることによって、心的外傷後ストレス障害(posttraumatic stress disorder: PTSD)をはじめ、うつ病、適応障害、不安障害等の精神疾患を発症することがある。」

そのような心的外傷の原因となる体験(いわゆる外傷体験)は、それを体験した個人をどのような事態に直面させ、その結果、当該体験者の自己防衛システムにどのような反応が生じ、具体的にどのような外傷症状が出現するかについて、問題文を要約しなさい。(400字程度)

〔設問２〕

親から児童虐待(例えば身体的虐待や性的虐待)を受けた児童が当該体験を通じて心的外傷を被った場合、社会は当該被害児童に対して具体的にどのような支援を提供すべきかについて、著者の論旨をふまえて論じなさい。(400字程度)

問題文

心的外傷とは権力を持たない者が苦しむものである。外傷を受ける時点においては、被害者は圧倒的な外力によって無力化、孤立無援化されている。外力が自然の力である時、これは災害である。外力が自分以外の人間の力である時、これを残虐行為という。通常のケア・システムは、自分は自分をコントロールでき、人とつながりを持って、自分がいることには意味があるという感覚を人々に与えるものであるが、外傷的な事件はこのケア・システムでは及ばない圧倒的な力を持っている。

かつては、そのような事件はそうあるものではないと思われてきた。1980年、PTSD がはじめて診断マニュアルに入れられた時、アメリカ精神医学会は、外傷的事件のことを「通常的人間的経験の範囲を超えたもの」とした。残念ながらこの定義は当を得ていなかった。レイプ、殴打などの性的暴力、家庭内暴力はいたるところにあるもので、女性の人生の一部となっており、通常経験の範囲外などというのはとんでもない話である。また、19世紀以来の戦死者数を頭に置いて考えるならば、戦争による心的外傷も人間体験のごくふつうの構成成分とみられるべきものであって、それがめったにないなどというのはよっぽどの極楽トンボである。

外傷的事件が正常範囲を逸脱しているのは、決してそれが稀にしか起こらないからではない。それは人生への人間の通常の適応行動をめっちゃめっちゃにになってしまうからである。ふつうの不幸とはちがって、外傷的な事件は生命を脅かし、身体の一貫性を脅かす。それは暴力と死とに個人を直接直面させる。それは人間を極限の孤立無援感と恐怖とに直面させ、破局反応を起こさせる。

(中略)

危険に対する人間の通常の反応は、心身両面を包含する反応が、複雑でありつつ統一されて一つのシステムを形づくっている。脅威をみとめると、まず交感神経系が賦活され、危険に遭遇した人間はアドレナリンの高鳴りを覚え、警戒待機状態（アラート状態）に入る。脅威はまた、直面している状況だけに注意を集中させる。さらに、脅威があると知覚が変化して異常となる。危険に遭遇した人間はしばしば飢えや渇き、さらには痛みさえも無視して顧みなくなる。最後に、脅威は怒りと恐怖という強烈な感情を起こさせる。この二つの感情は覚醒度を変え、注意力を変え、認知を変え、感情を変えるが、これは正常な適応反応である。この反応によって、脅威を感じた人間を断乎たる行動に向かって動員するのである。闘争しようとするか逃走しようとするか、どちらにしても――。

外傷的反応が起こるのは行動が無益な時である。抵抗も逃走も可能でない時には、

人間の自己防衛システムは圧倒され、解体に向かう。危険に対する通常の反応を構成するものはいずれも、その有用性を失いながら、現実の危険が去った後でも長期間持続する。それも正常とは違った、激しすぎる状態が続くのである。外傷的事件は通常の生理学的な覚醒度や感情や認知や記憶に深く長く続く変化を起こさせる。さらに、外傷的事件は正常な場合にはよく統合されている防衛機能をばらばらに働くようにしてしまう。外傷をこうむった人は、強烈な感情を自覚しているのに事件の記憶が明確でないとか、逆に細部に至るまで克明に記憶しているのに感情が動かないとか、いつも緊張し警戒し焦慮しているが、どうしてなのかわからないとかである。外傷症状はその発生源との関係が切れてしまう傾向がある。症状は独り歩きをしはじめる。

(中略)

世界の中にいて安全であるという感覚、すなわち〈基本的信頼〉は人生の最初期において最初にケアをしてくれる人との関係の中で得られるものである。人生そのものと同時に発生するこの信頼感はライフサイクルの全体を通じてその人を支えつづける。それは関係と信仰とのあらゆるシステムの基礎を形づくる。人間の最初の体験はケアされたということであり、このことが人間にその所属する世界のほうを向く力を与えるのである。この世界は人間の生命にやさしい生活となる。基本的信頼は、人生が切れ目なく連続したものであり、自然には秩序があり、そして超自然的な神の秩序があるという信念の根本である。

恐怖状況においては人々はおのずと慰藉と庇護の最初の源泉であったものを呼び求める。傷ついた兵士もレイプされた女性も母を求め、神を求めて泣き叫ぶ。この叫びに応答がなかった時に基本的信頼感は粉々に碎ける。外傷を受けた人々はただもう見捨てられ、ただもう孤独であり、生命を支えるケアと庇護との人間と神とのシステムの外に放り出されたと思う。以後、疎外感、離断感（切り離され感）が、もっとも親密な家族のきずなからもっとも抽象的な地域社会（世間）と宗教への帰属感に至るまで、ありとあらゆる関係に行きわたるようになる。信頼が失われた時、外傷を受けた人々は自分は生者よりも死者のほうに属していると思う。

(中略)

ケアをしてくれる人たちとの安全な結合感覚が人格発達の基盤である。この結合が粉碎される時、外傷を受けた人はその基本的自己感覚を喪失する。はるかな過去に解消していた幼少期と青春期との発達途上の葛藤がにわかに再び口を開ける。外傷は被害経験者を強いて、かつての自立とイニシアティヴ（主動性）、能力、アイデンティティ、親密性をめぐる闘争を復活させる。

発達途上の子どもの肯定的な自己感覚は、ケアをしてくれる人が権力をおだやかに使ってくれるから生まれるのである。親が子どもよりもはるかに強力であるのに子どもの個人性と尊厳性を尊重する姿勢を示してくれるからこそ、子どもは価値を与えられ尊敬されていると思い、自己評価が発達する。子どもはまた自立性をも発達させる。これは関係の中で自分は他とは別個の存在で〈自分は自分である〉という感覚である。子どもは自己身体のいろいろな機能を支配し制御するすべを身につける。自分のものの見方を形づくり、これを表現する。

(中略)

外傷的事件は必ず人間関係にダメージを与えるものであるから、被害者を取り巻く社会の人々は外傷の予後に影響力がある。周囲からの支持的な反応は事件の打撃力を和らげ、逆に否定的、敵対的な反応はダメージに上乗せされて外傷症候群を重症化するだろう。外傷的事件の余波期においては生存者はきわめて傷つきやすい。その自己感覚は粉々に打ち砕かれている。この感覚は、元来他者とのつながりによって築かれたものであるから、他者とのつながりにおいてしか再建できない。

外傷を受けた人が家族、恋人、親友に求める情緒的支援にはさまぎまの形があり、外傷が消退する過程で変化する。外傷直後においては最低限の信頼を再建することが最優先課題である。安全と庇護を保障することがもっとも重要である。取り残されて一人になることを恐れる生存者は同情的な人物が一人でもそばにいてくれることを強く求める。完全な孤立を一度経験した生存者は、危険を前にすれば人間のつながりがすべていかに脆いかを強烈に意識している。二度と見捨てられることはないということをはっきりと口に出して保証することが必要である。

(以下略)

ジュディス・L・ハーマン（中井久夫・阿部大樹訳）『心的外傷と回復〔増補新版〕』（みすず書房、2023年）48－90頁より抜粋。出題との関係で必要な補足、省略、変更を施している。

Trauma and Recovery 2nd edition by Judith Lewis Herman
Copyright © 1992, 1997 by Basic Books
Japanese digital reprint published by arrangement with Basic Books, an imprint of
Perseus Books, LLC, a subsidiary of Hachette Book Group, New York, New York, USA
through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo. All rights reserved

2024 年度入学試験 出題趣旨・解説・講評

【C 日程：論文】

《出題趣旨》—————

こころの問題は日本でも大きな社会問題となっている。本問は、トラウマ問題のバイブルとも言われるジュディス・L・ハーマン（中井久夫・阿部大樹訳）の名著『心的外傷と回復〔増補新版〕』（みすず書房、2023 年）を素材として、読解力、思考力および文章表現力を試そうとするものである。

《解説・講評》—————

【設問 1 に関する解説】

設問 1 は、著者の論旨に対する理解力を問うものである。本問では、外傷体験が当該体験者を「どのような事態に直面」させ、その結果、当該体験者の「自己防衛システム」にどのような反応が生じ、「具体的にどのような外傷症状」が出現するかを問うている。問題文中の該当箇所を的確に発見するには、上記の「」で強調した箇所（すなわちヒントないし誘導）に注目すること、その意味で「問いに素直に答える姿勢」が重要である。

〔設問 1〕の解答例

筆者によれば、外傷的な事件は生命を脅かし、身体の一貫性を脅かす。それは暴力と死とに個人を直接直面させる。それは人間を極限の孤立無援感と恐怖とに直面させ、破局反応を起こさせる。その結果、当該体験者の自己防衛システムは圧倒され、解体に向かう。危険に対する通常の反応を構成するものはいずれも、その有用性を失いながら、現実の危険が去った後でも長期間持続する。それも正常とは違った激しすぎる状態が続くのである。外傷的な事件は通常の生理学的な覚醒度や感情や認知や記憶に深く長く続く変化を起こさせる。さらに、外傷的な事件は正常な場合にはよく統合されている防衛機能をばらばらに働くようにしてしまう。具体的な外傷症状としては、強烈な感情を自覚しているのに事件の記憶が明確でないとか、逆に細部に至るまで克明に記憶しているのに感情が動かないとか、いつも緊張し警戒し焦慮しているが、どうしてなのかわからないなどが挙げられる。(398 字)

【設問 2 に関する解説】

問題文全体の読解力、思考力および文章表現力を試す問題である。本問では、著者の主張を前提に立論することが求められているのだから、解答にあたっても、まずは著者の論旨を端的に確認しておくのが望ましい。例えば、「外傷直後においては最低

限の信頼を再建することが最優先課題である。安全と庇護を保障することがもっとも重要である。」といった箇所などは特に重要である。

そのうえで、これを児童虐待事例に当てはめていく作業が必要となる。児童虐待事例に固有の問題点は、本来「基本的信頼」を提供し、「安全と庇護」の保障が期待されるはずの親自身が加害者であるという点である。仮に片方の親だけが加害者であったとしても、事件として顕在化した時点で、もはや家庭内に児童の安全を期待し得ないとするのが自然である。この点を十分に理解しているかが評価のポイントの一つである。その意味で、被害者の家族が関わる限りにおいて著者の論旨については一定の修正が必要となろう。

例えば、「安全と庇護」の保障については、加害者たる親から引き離すという方策を検討せざるを得ないであろう。すなわち、被害児童のためのシェルター施設の提供などである。ちなみに、現行法上は児童福祉法の一時的保護（33条）がこれに相当するが、もとより本問は法的知識を問うものではないから、この点への言及は評価に影響しない。

また、「基本的信頼」の提供についても、筆者が主張するように「他者とのつながりにおいてしか再建できない」のだとすれば、加害者たる親や被害時の家族環境にその役割を期待し得ない以上、他の第三者によるケアを検討せざるを得ないであろう。もっとも、それを誰が（あるいはどの機関が）どのようなサポート態勢の下に提供できるか（すべきか）は、現状では難しい問題である。その意味で本問は、児童虐待に固有の問題が的確に論じられているかどうかが基本的な評価のポイントとなる。

〔設問2〕の解答例

筆者は、「外傷直後においては最低限の信頼を再建することが最優先課題である。安全と庇護を保障することがもっとも重要である。」と論ずる。児童への身体的虐待や性的虐待は、その「生命を脅かし、身体の一貫性を脅かす」と言っても過言ではないから、まずは加害者たる親から引き離し、その安全と庇護を保障しうるシェルターのよう施設で保護することが考えられる。

他方で、著者は、心的外傷により「その自己感覚は粉々に打ち砕かれている。この感覚は元来他者とのつながりによって築かれたものであるから、他者とのつながりにおいてしか再建できない。」とも述べている。特に子どもの場合には、自分をケアしてくれる人との「基本的信頼」の形成が重要とも述べている。本来はそれを果たすべき親が加害者である点に、児童虐待に固有の難しさがある。そのため、親に代替しうるケアとして、施設での保護や里親委託等の福祉的施策を検討せざるを得ない。(398字)

【講評】

設問1では、上記のヒントないし誘導に即して問いに解答できている答えは必ずしも多くなかった。また、そのうち「自己防衛システム」については、危険に対する人間の「通常の反応」の部分を紹介しすぎて、その「解体」等への言及が不十分になっ

ている答案も散見された。さらに「具体的な」外傷症状についても、必ずしも具体的な症状に言及できておらず、その意味で問いに答えられていない答案も散見された。逆に、誘導に即して問いに素直に答えられた答案には高い評価が与えられた。

設問２では、上記のような問題の所在を的確に指摘できている答案は必ずしも多くなかった。すなわち、「基本的信頼」の形成又は回復に本来重要な役割を果たすべき親に対し、虐待事例ではそもそもそれを期待しないという点である。この点を十分にふまえないままに具体的支援策を論じても、必ずしも説得的な論旨展開とは評価しえない。さらに、「著者の論旨をふまえて」と指示されているにも関わらず、著者が主張していない内容を展開する答案すら見られた。

設問１にせよ同２にせよ、「問いに答える姿勢」が肝要である。

以 上